外来哺乳類による環境問題

世界遺産の島々では、外来種の持ち込みが大きな問題になっている。奄美大島では島の固有種に最も明らかな悪影響を与える二種類の動物がいる。第二次世界大戦後、島内に生息するハブを駆除するため、数千頭のハイイロマングースが導入されたが、アマミノクロウサギやアマミイシカワガエルなど他の動物も捕食してしまい、在来種の個体数に深刻なダメージを与えた。2000 年に島の生態系のバランスを戻すためのプログラムが始まり、2005 年には「奄美マングースバスターズ」がマングース捕獲作戦を開始した。その努力は成功し、今ではマングースはほぼ見られなくなり、絶滅の恐れがあった動物の個体数も回復し始めた。また、野良猫も森や民家以外の場所に入り込み、奄美大島の固有種であるネズミやウサギの絶滅危惧種の脅威になっている。マングースがほぼ絶滅した今、猫の捕獲に集中し、数を減らすことに力を入れている。